



### ■■■ショートコメント■■■

◆「本能寺ホテル」という名前と路地裏に佇むレトロな外観に魅かれてチェックインしたうえ、京都名物で織田信長も愛したという金平糖を食べたところ、いきなり時代が「本能寺の変」の前夜たる1582年6月1日にタイムスリップ。勤めていた会社が倒産し、仕事探し中のヒロイン(?) 倉本繭子(綾瀬はるか)はそこでまず森蘭丸(濱田岳)と出会い、その後意外な形で織田信長(堤真一)との「ご対面」も果たすことに……。

◆万城目学の原作を綾瀬はるかと堤真一の共演で映画化した『プリンセス・トヨトミ』(11年)はハナから観る気がしなかったが、さすがに「本能寺の変」がテーマとなると観ておかなくちゃ……。

そう思って試写室に入ったが、CGをふんだんに使い、エレベーターから出入りするたびに現代と400年前を交錯させる映像は美しいものの、そのスピード観のなさとミエミエのストーリー展開にすぐにうんざり。歴史ミステリーをテーマにしたテレビ番組はいろいろあるが、そんな番組の「特番モノ」のような映画づくりでホントにいいの? さらに、一目でこれは森蘭丸、これは織田信長とわからず、かなり話しが進展してから「ひょっとして……」と気づく繭子が社会科や歴史の先生を希望していると知ってビックリ! これでは今ドキの中高生の歴史のレベルが落ちてしまっているのも仕方なし……?

◆東京に住む繭子が京都に赴いたのは、建設会社の設計士として忙しく働いている婚約者の吉岡恭一(平山浩行)が父親・吉岡征次郎(近藤正臣)の金婚式に繭子を招待したため。恭一は父親への紹介をきっかけに繭子と結婚しようと考えていたが、彼はどこまでホントに繭子のことをわかっているの?

繭子の方も会社の倒産を契機に「永久就職」もありかな、と考えていたが、乱世を統一するべく毅然と生きている織田信長の姿を見てその魅力に魅かれていくと、繭子の姿勢にも少し変化が……。すると、そんな変化を敏感に感じ取った恭一は……?

◆「本能寺の変」は織田信長の遺体（首）が発見されないうえ、明智光秀の謀反の動機の説明がイマイチだし、羽柴秀吉がなぜあんなに早く「中国大返し」を成功させることができたのかの説明もイマイチ。要するに「本能寺の変」には日本史上最大の謎が残っているわけだ。

冒頭にそんな問題提起が明確に示されると、タイムスリップものの歴史ミステリーたる本作に興味が深まったが、スクリーンで見せられる歴史ドラマの各シーンは定番のストーリーのつまみ食いだけ。これでは何の謎解きにもつながっていないから、「歴史ミステリーもの」の看板が泣くだけだ。せつかく繭子がタイムスリップして織田信長が自害する直前まで同行したのなら、何か手をうつことはできなかったの・・・？

もっとも、そんなことをしたらホテルの支配人（風間杜夫）が言うように歴史が変わってしまうから、繭子にそんな大それたことをやらせるかどうかは本作の脚本上の大問題なのだが・・・。

◆2013年のNHK大河ドラマ『八重の桜』では、新島八重役で主役を務めた綾瀬はるかの前向きかつひたむきな姿が目立っていたが、この女優には何といってもノホホンとしたとぼけた味の天然キャラがピッタリ。そんなキャラだから、何度も現代と戦国時代を行き来する中で森蘭丸や織田信長との交流を深めるとともに、何度か命からがらの経験をしてそこを生き延びることができたわけだ。そんな体験は誰でもできるわけではないから貴重なもの。本能寺ホテルの支配人ですら1度も経験できない戦国時代へのタイムスリップを、繭子だけが体験できたのは一体なぜ？

私のように難しいことを言わず、本作の鑑賞によってはじめて「本能寺の変」やその謎を知ったという日本の若者は、女優綾瀬はるかと共に本能寺ホテルを中心とした京都観光をイメージすれば楽しいかもしれない。もっとも、そのレベルでは日本が中国や韓国にどんどん追いつき追い越されていくことに歯止めをかけることは到底無理だろうが・・・。

2016（平成28）年12月21日記